

# 学位論文要旨

提出者 山下 靖子

## ハワイの「沖縄系移民」に関する国際社会学的研究 — 戦後沖縄問題からみるエスニシティの「回復」と「限界」からの可能性—

近代国家日本の武力行使により断行された琉球処分後の沖縄は、包摂と排除のもと、法的にも社会経済的にも不均衡な地位を強いられた。抑圧、服従といった差別的状況からの脱却の手段として新天地ハワイへ希望を抱き、多くが移民した。本論文の関心は、移民先ハワイでどのように沖縄と「ヤマト」の関係が再生されたのか、ヤマトとの関係が、ハワイ社会の沖縄系移民のあり様にどのように影響を与えていたか検討することである。

本論文では、歴史的な分析視点とともに、地域研究による重層的な関係性を重視した国際社会学的なアプローチを採り「戦後 1945 年から 1972 年までのハワイの沖縄系移民のエスニシティは、ヤマトと沖縄の関係によって条件付けられた」という命題のもと、以下に示す要因について検討する。つまり、1) 戦前からの沖縄とヤマトとの関係、2) ハワイにおける沖縄系移民と他府県人との歴史的関係、3) 冷戦という国際条件、3) とかわり 4) a. アメリカの占領下に置かれた沖縄を取り巻く環境、b. アメリカの対沖縄政策、c. 沖縄移民にとっての沖縄問題、5) アメリカの準州であるハワイという地域の独自性といった要因である。その上で、これらの要因が、戦後ハワイの沖縄系移民のエスニシティの「回復」の過程とどのように関連付けられるかについて分析した。この「回復」を巡り、別の視点から検討するため第二部では、湧川清榮の沖縄系移民を巡る思想の分析を行った。

第 1 章において、琉球処分後、沖縄がヤマトとの関係において強いられた不均衡な関係が、移民先ハワイにおいても、沖縄系移民対他府県人との関係において再生されたことを示した。両者の差別的関係はハワイ生まれの二世にも引き継がれ、沖縄系移民は大日本帝国の臣民として、沖縄人としてのエスニシティをスティグマ化し、日本人への同化を自ら積極的に行った。この状況が一変したのが日米大戦の勃発であり、ハワイ社会のエスニックな問題を不問とし、「アメリカ人」か「日本人」か、二項対立のナショナリティを迫る状況をもたらしたことを示したのが第 2 章である。「アメリカ人」であることの「忠誠」と「服従」を示した結果、戦後のハワイ社会では、日系人の社会経済的地位は上昇し、白人中心のアメリカ社会に差別撤回を求め、権利要求運動を展開した。「真のアメリカ人」になるため沖縄系移民も、「日系人」としての枠組に留まることを重視した。戦前の沖縄系移民と他府県人との関係は、戦時に一緒に戦った同胞となり、両者の溝は消滅し、「日系アメリカ人」として戦後のハワイ社会において成功の道を辿ったかのようにみえた。し

かしながら、沖縄系移民にとって、第二次大戦の持つ意味合いは、他府県人とは決定的に異なっていた。

この違いを第3章で示した。沖縄戦である。戦前スティグマ化された「オキナワ」は、沖縄戦によってリアルな沖縄として沖縄系移民の前に現れた。荒廃した沖縄の様子を知り、沖縄系移民は沖縄民族の消滅の危機感を抱いた。「郷里の我同胞を救う」ため、海外の沖縄系移民によるトランスナショナルな沖縄救済運動を通して、「沖縄人」としての意識は変化した。負から正の「オキナワ」へのシフトである。「沖縄人」の独自の組織 UOA を設立し、フイマカアラのような二世組織が誕生した。同時に、戦後の沖縄のアメリカ支配という状況が沖縄系移民にとって、彼らのエスニシティの「回復」を後押し、これまでの「負」=マイナスのエスニシティを、「誇」=プラスへと転化していった。

ハワイの沖縄系移民のエスニシティの「回復」の一方、アメリカの占領下に置かれた沖縄の帰属にかかわる問題をハワイの沖縄の人々がどう見ていたかを第4章で検証した。結果的に日本からの沖縄の分離を肯定的に捉えた見解が多くみられた。分離を肯定的に捉える背景として、1. 移民前の沖縄と日本の関係が投影されていること、2. 日米大戦において日本は沖縄を守らなかったこと、3. ハワイ社会での沖縄系移民の「発展」、4. 戦後沖縄系移民のハワイにおける地位と他府県人との関係及び、基地沖縄の重要性、5. 冷戦の進行と沖縄系移民の関係をあげた。

第5章では、第4章と同様の問題関心から沖縄返還が実現されるまでの沖縄系移民の沖縄問題の捉え方を明らかにした。この時期、ハワイの沖縄系移民が、対沖縄文化政策を円滑に進めていく上での最も適した担い手として、巧みに取り込まれていったことを明らかにした。レターキャンペーンや沖縄とハワイの人物交換プログラム「琉布ブラザーフッド・プログラム」がその例である。対沖縄統治政策の中心に位置付けられることによって沖縄系移民のエスニシティの「回復」は加速し、「恥」のエスニシティから「誇り」のそれへと変容するにあたり十分に影響力を発揮した。沖縄帰属問題と同様に、沖縄返還に対して沖縄復帰を口に題すことが憚られるほどに沖縄系移民は沖縄返還に反対していた。反対についての見解の分析から、概ね帰属問題と同様、その背景として、1. 歴史的経験、2. 日系人社会と沖縄系移民社会の関係、3. 米国とのかかわり、5. 国際的条件と基地沖縄があげられる。「日本復帰論」を主張する声も少数ながら聞かれた。それらは、日琉同祖論に基づいたもの、沖縄統治を異民族支配と指摘し、沖縄の日本復帰を訴える声などであった。

本論文では第二部を設けることによって、湧川清栄の視点から、第一部で取り上げた沖縄系移民のエスニシティの「回復」および沖縄問題に対する沖縄系移民の見解の再検討を試みた。湧川は、沖縄の知識人／言論人が抱き続けていた問題をハワイの沖縄系移民に見出した。沖縄系移民の「回復」の背後にアメリカの沖縄支配の「暴力」を指摘した。それは戦前のヤマトと沖縄の関係の根底に在る問題であった。ゆえに湧川は、沖縄系移民の「日本復帰」反対論者を批判した。アメリカの対沖縄政策の支持が自らの「発展」に繋が

ると信じていた UOA を中心とする沖縄系移民社会は、アメリカの方針に異を唱える湧川を「アカ」と呼び、異質な存在と位置付けた。にもかかわらず、民族の解放と沖縄人による沖縄人の自主性のある社会の創造は、「日本復帰」によってのみ可能であると信じた湧川は、同胞にもそのことを伝えようと、エスニシティの「回復」に対する「限界」を訴えた。つまり、湧川の目指したものはアメリカの軍事支配への協力によって許されるエスニシティではなく、軍事支配といった抑圧からの解放であった。

湧川の復帰思想は、かつて更生会を立ち上げ沖縄同胞を救済したいという思いが根底にあった。沖縄の大学創設を唱えた思いは、米軍の沖縄統治への抵抗があり、「沖縄人の手による、独自の、自主的大学」の創設であった。「復帰」とは、「民族としての沖縄人独自の歴史と文化に誇りを持ち、人民としての基本的権利に目覚めた、自尊心もあり、ヒューマニズムも解し得る沖縄人の純潔な要求」を意味した湧川にとって、アメリカと沖縄の真の関係は、支配・被支配の関係が存在する限りはありえない。異民族間の「親善」は、双方が平等の権利と相互間の完全自由を認めて初めて可能なものとなる。ゆえに、真にアメリカの将来を思う人々こそ現在の為政者を猛烈に批判し、他方、権力者に媚びる者こそアメリカの民主主義を冒瀆する反米主義者だと批判した。「復帰」とは植民地主義からの民族解放であり、民族解放の要求は民主主義の理念であると考えた湧川の思想こそ、沖縄の知識人らが問い続け、求め続けた「沖縄人」の尊厳の「回復」であった。こうした思想は比嘉静観の「コスモポリタニズム」、比嘉春潮の「世界主義」であり、「琉球民族」意識（伊波）の発露であった。こうしてみると、湧川が同胞へ突きつけるエスニシティの「回復」への批判は、「回復」に対し、その「限界」を示したと言えるのではないか。

しかしながら、「限界」が提示されたからこそ、その先に沖縄系移民のエスニシティの新たな「回復」を見出すことが可能となる。序論で、沖縄文化が称揚されるとき、その表象の背後には権力や暴力の構造が隠蔽されていると指摘した。湧川はまさに、沖縄系移民、そしてかつて封印されていたオキナワンアイデンティティ・文化が称揚される、その背後に権力と暴力の構造を見抜いていたといえる。それゆえに、新たなエスニシティの「回復」を示唆したのではないか。

本論文では、主要課題であった沖縄系移民のエスニシティの抑圧から「回復」のありようを、ヤマトとの関係を軸に、同時に、それを様々な国際関係の文脈の中に位置付けて描き出した。沖縄帰属／返還問題に沖縄系移民のアイデンティティが投影され「沖縄の復帰反対」となって表れたことも示した。しかしながら、湧川は反復帰論者を批判し、アメリカの対沖縄政策と沖縄系移民の根底にある問題を、自身の日本復帰論から明らかにした。湧川の指摘はまた琉球処分後の沖縄の知識人たちの思想と共鳴していることを示した。

最後に、今日ハワイの沖縄系移民のエスニシティにかかわる研究の多さは、かつて日系移民研究の枠組みに包摂されていたことを考えると驚異的とも言えよう。では、なぜ沖縄系移民のエスニシティは他の日系人と異なるのかという最初の関心に立ち戻るとき、ヤマトと沖縄の関係を無視できない。戦後のエスニシティの「回復」の背景は、戦後のアメリ

カ<sup>1</sup>の占領下に置かれた沖縄に対する対沖縄政策との関係から捉える必要がある。現象を追うだけでは見えてこない。対沖縄政策に取り込まれた沖縄系移民は愚かで、批判されるべき存在なのか、否である。幾重もの権力のもと服従と抑圧を強いられてきた沖縄系移民の生きるストラテジーであった故である。彼らの復帰反対論には彼らの「ヤマト」への思いが反映された。湧川が気付かず、沖縄系移民との間に溝があったとしたらこの点においてだろう。一方で、そこに横たわる湧川の指摘は重要であった。彼の指摘こそが琉球処分以来沖縄が抱えてきた問題と共鳴し、それは、今日沖縄系移民の次なる段階のエスニシティのありようへと繋がっている。本論文は、国際社会学的研究のアプローチを踏まえた沖縄系移民に関する一研究になることを願う。